

丘の下

小川未明

青空文庫

年雄は、丘の上に立つて、ぼんやりと考えていました。

「学校で、みんなと別れるときは悲しかった。先生にごあい

さつをすると、先生は、みんなに向かつて、こんど年雄くんは、

お父さんが転勤なさるので、遠くへいかれることになったから、

よくお別れをなさいとおっしゃったのだ。みんなは、僕に手紙を

くれよといって、所番地を紙片に書いて僕のポケットの中へ

入れてくれたつけ。しかし、住所だけで、名を書いてないも

のは、だれだかわからないのだ。きつと、顔を知っているから、

そのときは、いいと思っただのだろう。」

仲よく遊んだ、友だちの顔が、一人、一人、はつきりと目に映

ったのでありません。

それは、ちようど夏の^{なつ}はじめであつたが、いまは、はや秋も末^{あき すえ}になつていました。あちらは、じき雪^{ゆき}の降^ふるころであらう。年雄^{としお}は、北^{きた}の遠^{とお}い地平線^{ちへいせん}をながめました。あの雲^{くも}の漂^{ただよ}つている下^{した}に、自分^{じぶん}のなつかしい学^{がっこう}校^ががあるのだ。いまごろ、みんなは、どうしているだらうかと思^{おも}つたのです。

キチ、キチといつて、小鳥^{こどり}が、けたたましく鳴^ないてうしろの雑^ぞ木^き林^{りん}の中^{なか}へ下^おりました。美^{うつく}しく色^{いろ}づいた葉^はも、だいぶ散^ちつてしまつて、林^{はやし}の中^{なか}は、まばらに枝^{えだ}が見^みえていましたが、その鳥^{とり}の姿^{すがた}はよくわかりませんでした。日^ひの光^{ひかり}は、ほのかに足^{あし}もとをあたためて、草^{くさ}のうちには、まだ生^いき残^{のこ}つた虫^{むし}が、細^{ほそ}い声^{こえ}で、しかし、

朗らかに歌をうたっていました。

「なんて、平和で、静かな景色だろう。」

彼は、懐中から、スケッチ帖を出して、前方の黄色くなつた田圃や、灰色にかすんだ林の景色などを写生しにかつたのであります。

「あの光るのは、水かな。」と、彼は、田の中を流れる小川に目を注いでいました。そのとき、がやがやと声がして、丘の下を、学校の遠足が通つたのであります。

「どこの学校かしらん。こんなに遅くなつてから、遠足するのは？」

年雄は、鉛筆を握つたままで、しばらく、その列をながめて

いました。彼の目は、いま列の先頭に立って歩いていく、先生の姿にとまったのです。

「小山先生に、よく似ているが。」

小山先生こそ、いままで思い出していた、やさしい先生で

ありました。列の先頭になつていく先生は、背が高く、黒い

洋服を着て、うつむいて歩いていられます。小山先生の姿と

癖そのままであります。

「ああ、あの太つた、洋服を着た女の先生も？」

年雄は、その先生が、学校にいられたのを記憶しています。

どきどきする心臓を、こらえるようにして、目をじつと下に

向けていると、列の終わりに、こんどはロイド眼鏡をかけて髪を

長くした、若い先生が、後れながらついていかれます。

「ああ、あの先生も、たしかにいられた。」

年雄は、不思議でならなかったのです。

「どうして、こんな遠いところまで、遠足にいらしたのだろう

? きつと来年、卒業する六年生かもしれぬ。どれ、

走っていつて見よう。」

年雄は、小山先生だったら、飛びつきたいのでした。スケツ

チ帖を懐中に押し入ると、丘を駆け下りました。

「小山先生だったら、うれしいんだがなあ。先生は、僕の顔

を見たら、びつくりなさるだろう。おお、おまえはこんなところ

へきたのか? こんどの学校はどんなだねと、おっしゃるにち

「がない……。」

彼の顔は、勢い込んで、真っ赤になりました。田圃の道のある

ところ、ないところ、かまわずに走って、列に追いついて見ると、

なんとこの近村の学校の生徒たちであつたのであります。彼

は、がっかりしてしまいました。そして、ますます別れてきた先

生や、お友だちが恋しくなりました。

彼は、泣きたい気持ちになつて、独り川辺を歩いていました。

夏のころ、どこの子供のつけた足跡かしのれないが、浅瀬のどろ

の上に残っていました。

きつと、魚をすくいにきたか、それとも、泳ぎにきたときにつ

けたのだらう。

年雄としおは、その足跡あしあとに、なんとなくたか親しみしたを覚おぼえたのです。高たか
 い木きの立たつていむらる村はいへ入みると、お宮みやがありました。また、百しやう姓う
 家やがありました。すこしくおうらいと、往お来うのひ日ひだまりにこ子こ供どもたち
 が遊あそんでありました。そこは、くぼ地ちになつていて、そばに大おきな
 かきのき木きがありました。それから散ちつた葉はが、一めん面めんにひろがつて
 いました。なかには、真まつ赤かなのや、紫むらさきいろ色いろがかつたのや、美うつく
 しいのもあれば、もう色いろのあせてしまつて、からからに乾かわいたの
 もありました。

おばあさんが、それを掻かき集あつめて、火ひをたいていました。煙けむりが
 ゆるく上のつています。鶏わとりが、クウ、クウと、いいながら、餌えをあ
 さつています。その近ちかくで、男おとこのこ子こや女おんなのこ子こが、遊あそんでいました。

男おとこの子こは、めんこをしていました。赤あかいちゃんきをき着た、
 小ちいさな女おんなの子こが立たつて、それを見みていました。

「ずるいや、いつも、そんなのばかり出だして。」と、一ひとり人おとこの男この子こが、一ひとり人おとこの男この子こにいいました。悪わるいめんこを出だして、いいの
 を取とろうとしていいるからからからからです。

「大おおきいいののを出だせよ。」

その男おとこの子こは、あくまで、相あいて手てに大おおきいめんこを出ださせようと
 していまいました。しかし、相あいて手ての男おとこの子こは、手てにいいいののを持もちなが
 ら、なかななかそのいいいののを出だそうとしませんでした。

「僕ぼくも出だしたんだらう。君きみもいいいののを出だしよ。」

このとき、いっいつつししよよに遊あそんでいる、他たの男おとこの子こが、

「やかましく、いうなよ。」と、おこっている男の子をなだめて、
仲裁ちゆうさいしました。

「だって、ずるいや。」

「いいよ。あいつ、大きいのを取られると、泣くんだから、よせ
。」と、仲裁ちゆうさいに入った、男の子がいました。

恥ずかしめられた子は、いたたまらなくなつて、あちらへ逃げ
ていこうとしました。が、やはり、手に持っているいいめんこを
出だそうとしました。

「あいつ、卑怯ひきようだね。」と、そこにいる男の子たちが、いうと、
女の子まで、さげすむような目つきをして、去さつていく男の子を
見送みおくっていました。

「どこにも、あんなずるい奴やつがいるんだな。」と、年雄としおは思おもいま
した。彼は、半日はんいちの散歩さんぽで、思おもいがけない、いろいろのことを
経けい験けんしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「小学四年生」

1938（昭和13）年1月

※表題は底本では、「丘《おか》の下《した》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

丘の下

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>